音　楽　科

渋　谷　知　宏

Ⅰ　研究主題と音楽科

１．研究主題のとらえ方―教科の目指す生徒像

音楽科では、研究主題を踏まえ、本教科で目指す生徒像を次のように考え、３年次の実践に取り組んできた。

【音楽科の目指す生徒像】

音楽表現の豊かさを味わい、音や音楽の捉え方を広げることができる生徒

音楽科では、表現や鑑賞の幅広い活動を通して、音や音楽のよさや美しさなどの魅力を感じ取りながら考え、自分なりに理解し、音や音楽と豊かに関わる喜びにつながることを大切にして授業づくりを行っている。〔共通事項〕の学習を支えとして、音楽を形づくっている要素のはたらきについて実感を伴いながら理解すること、音楽として表現するための技術や発声などの基本的な技能を高めていくことで、自分なりの思いや意図を音楽表現に生かすことができるようになると考えている。それが高まっていると生徒自身が実感したとき、更によいものを目指したい、もっとやってみたい、もう一度演奏したい、聴いてみたいという主体的な活動へとつながっていくと考える。生徒が音や音楽と出会う場面を大切にし、一人一人が音楽的な見方・考え方を働かせて、音や音楽と豊かに関わることができる生徒を育てていきたい。

【３年間で目指す具体的な生徒の姿】

重視して育てる資質・能力	教科で育てる資質・能力	手立て
よりよいものを求める探究心や自主性、社会性	・音楽活動を通して、音楽のよさや美しさなどを深く味わおうとする態度	・生徒の興味・関心を高める魅力的な課題や題材を設定する。 ・音楽を自分なりに解釈したり、他分野や自己の生活と関連付けたりするために、様々なジャンル楽曲から教材を選択する。
知識や技能、経験の生かし所を見いだす力	・音楽を形づくっている要素のはたらきを知覚したことと、音楽のよさや美しさなどを感受したことを関連させる力	・共通事項に示されている要素のはたらきをとらえる場を設定する。 ・音や音楽の感じ方を広げるために、「感じシート」一覧を作成し配付する。 ・音や音楽の捉え方の模範を示す。
場に応じて判断基準をつくる力	・知覚・感受したことを生かして、音楽表現を創意工夫する力	・発声、奏法、記譜などの音楽表現するための技術指導をする。 ・模倣と反復を行う時間を確保する。
学びを評価し、課題を見付ける力	・音や音楽を聴き、音楽の感じ取り方の多様性を理解する力	・音や音楽の捉え方の違いを実感させるために、比較する場面を設定する。 ・他者の考えを共有・共感できる場を設定する。

２．研究のあゆみ

音楽科では、教科として育てる資質・能力として、特に「音楽を形づくっている要素のはたらきを知覚したことと、音楽のよさや美しさなどを感受したことを関連させる力」、「知覚・感受したことを生かして、音楽表現を創意工夫する力」を重視して、研究に取り組んできた。

具体的には、「音楽を形づくっている要素のはたらきを知覚したことと、音楽のよさや美しさなどを感受したことを関連させる力」について、〔共通事項〕に示されている音楽を形づくっている要素のはたらきが、実際の音や音楽の特徴や曲想とどのように関わっているのか、生徒たち自身が実感できる授業づくりを目指してきた。また、「知覚・感受したことを生かして、音楽表現を創意工夫する力」について、知覚・感受したことを基に、どのように音楽表現するか試行錯誤する場を設定し、取り組ませきた。この取り組みで、音や音楽の捉え方が広がり、どのように音楽表現するか生徒たち自身で考えている姿が増えてきた。このような学習を積み重ねていくことで、生徒が自身の音楽表現の高まりを実感し、よりよい音楽表現を追究したり、音楽のよさや美しさをより深く味わって聴いたりする力が育成することができると考えている。

３．教科としての振り返り

実践を通しての成果（〇）と課題（▲）は以下の通りである。

〇生徒たちは様々な音楽活動を通して、よさや美しさ、楽しさを味わっていた。特にその姿が現れていた場面を領域・分野別にみてみると、「歌唱」においては、自分たちで歌唱表現を工夫する姿があったこと。「器楽」や「創作」では、楽器の音色や響きを感じ取りながら演奏できるようになろうとくり返し取り組んでいる姿、作品を完成させようと音の重なりを何度も試しながら考えている姿があった。また、「鑑賞」においても、授業で聴いた楽曲に対して自分がこれまで持っていたイメージと変わったと回答していた生徒や自分の音楽プレーヤーに楽曲を取り入れて楽しんでいるという回答もあった。今後も、題材や課題に必要感や学習する根拠が感じられるものを設定し、自己の技能の高まりがよりよいものを目指していく原動力となるよう意識し、このように考える生徒が増えていくよう工夫を重ねていかなければならない。

〇音楽を形づくっている要素のはたらきを知覚したことと、音楽のよさや美しさを感受したことを関連させたことを生かして、音楽表現を創意工夫することにつなげることができる生徒がでてきた。指導者の音楽の捉えを歌唱表現などで模範を示したことで、生徒自ら他の楽曲でも知覚・感受を結びつけて音楽を捉え、どのように音楽表現するか試したり、話し合ったりしている姿につながっているようだった。技能面において生徒だけで課題を解決していくのは限界がある。今後も、指導者が模範を示し、新たな視点に気付かせたり、音楽表現の仕方に選択肢を与えたりしながら思考させ、その音楽表現するための技能を身につける必要感を持たせることが大切であると感じた。

▲音や音楽を聴き、音楽の感じ取り方の多様性を理解する力について、他者の考えを共有・共感できる場を設定することで、その楽曲のよさや面白さを味わったり、自分と違う音楽の感じ取り方を知り他者の考えに納得したりしている生徒はいる。しかしながら、その後の深まりが感じられない。共有・共感させる方法やタイミングなどをどう設定するか、課題に対しての振り返り方が相応しいものになっているか、様々な手法を検討していかなければならない。

▲以前からの課題であった、生徒が自ら気付くことのできる音楽を形づくっている要素について、偏りは少なくなってきていると感じる。しかし、一つの題材のどの場面でどの要素を扱うのか、また、題材間でのマネジメントが不十分である。音楽を形づくっている諸要素のはたらきに注視させる題材や教材開発を引き続き行うとともに、年間学習計画も他教科との関連も図りながら見直し、整理していきたい。